

# 本を選ぶ

NO.475 2024年(令和6年)12月20日

●発行/ライブラリー・アド・サービス

<https://www.las2005.com>

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

●<ろん・ぼわん>呪文を唱えれば 続々

●図書館を離れて (第62回)

—続 好奇心のままに—



●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

## 呪文を唱えれば 続々

四つ角という言葉は若い世代には通じないらしい。辻という言葉もしかり。説明すると納得するが、いかにも古めかしい言い方のようだ。本欄は以前は<あんでな>だったが、<ろん・ぼわん>と改称された。人と人、人と本が交わるところという趣旨(期待)である。当時はこの単語が珍しかったのか読者から問い合わせがあったようだ。四つ角でもなければ辻でもない、さらには信号もない多くの道が交差する環状交差点は説明しにくい。

リンボー先生こと林望がイギリスの場合を熱く紹介している(『ホルムヘッドの謎』文藝春秋/1992)。イギリスではロン・ポワンをラウンドアバウト roundabout と言う。イギリスのラウンドアバウトをフランスが移入したのがロン・ポワンである。

車好きのリンボー先生が延々と解説する。要点だけにすると“なにはともあれ、ラウンドアバウトは一切の例外無く時計回りの一方通行である。次にラウンドアバウトの内部に既に進入している車が全ての周辺流入路に対して絶対的優先通行権を有する。右側から来る車が優先権を持つので、ラウンドアバウトに入ろうと思うときはまず右から車が来ないかどうか確かめて、右からこのラウンドアバウトを周回してくるのを認めたら、その

車が自分の前を通過してしまうまで周回路内に入ってはいけない。進入する道路から見てすぐ左隣の道に進みたいときは、左折信号(ウインカー、以下同様)を出しながら一番左の車線を進み、すぐに左折してラウンドアバウトを離脱する。それ以外の道に進みたいときは、右折信号を出しつつ進入してラウンドアバウトを周回し、目的の道の一つ前の道を過ぎたときに左折信号に切り換えて、目的の道に左折で入り、ラウンドアバウトを離脱する”(46-47頁)。もちろん信号機がない。

ドーバー海峡を渡ったフランスでは、当然イギリスの左側通行(時計回り)を右側通行(反時計回り)に直したシステムだ。やはり信号機がない。例としてわかりやすいパリのシャルル・ド・ゴール広場(エトワール広場)は12本の道路が交わる。

さて、今年もクリスマスが近くなってきた。「もうすぐクリスマス。12月も半ばのある朝、目覚めればホグワーツは深い雪におおわれていた」。『ハリー・ポッターと賢者の石』第12章はハリー・ポッターにとってホグワーツ魔法魔術学校での最初のクリスマスから始まる。11歳の誕生日に届いた魔術学校への招待状にハリーは困惑しながらも、入学への道を選ぶ。違う道を選んでいたら、ハリーは魔術や呪文とは無縁の人生を歩んでいたはずだ。

ホグワーツ魔法魔術学校の大広間には盛大なクリスマスの飾り付けが登場するだろう。異常気象で世界中が不安を募る現実世界を、ハリーたち魔術者は一体どんな風に眺めているのだろうか。さすがに強い呪文でも異常気象は手に負えないか。(埜村 太郎)

# 図書館を離れて (第62回)

— 続 好奇心のままに —

並木 せつ子

## むかしの新聞

調べものをするときに、明治期から昭和初期の新聞には随分お世話になった。マイクロフィルムや新聞データベースから複写すると、必要な記事は1頁の中のほんの一部でも周辺にさまざまな記事が写り込む。そこには今なら許されないであろう記事や、どぎつい見出しが自由に気ままに使われ、驚いたり呆れたりしながらも、気がつけば本筋を忘れ、しばし周辺の記事や広告を読みふけることに……。

阿川佐和子は<何が面白いって、記事の周りのボンカレーの広告とか、スキャンダル記事から、時代背景が見えてくること>と大宅文庫の古い雑誌について語っている（朝日新聞2023.7.19）。そう、周辺の諸々について目も奪われてしまうことは誰にだってあるのだ。

使用したのは『埼玉新報』『国民新聞』『東京日日新聞』『読売新聞』『東京朝日新聞』だが、一番多いのは地域の歴史を調べるテーマが多かったためか『埼玉新報』（埼玉県で明治から大正初期に発行されていた新聞）だった。その時々々のテーマに応じて無秩序に集めた記事なので、掲載紙も掲載時期も偏っていて一貫性は全く無いが、テーマに関係なく記事を眺めていると“むかしの新聞”の持つ独特な「匂い」が感じとれる。

当時の新聞は、今日の厳しい規準——人権、ハラスメント、コンプライアンス、プライバシー……に照らして見れば不適切極まりないものが多い。コレラ、赤痢、天然痘など感染症が発生すると、感染者の住所・氏名・年齢まで発表されるのだからプライバシーなどあったものではない。“○○（町村名）だより”として各町村の花柳界を茶化したような記事が頻繁に、しかも面白おかしく取り上げられているのも今では考えられない。

## ●投書欄

明治39年から42年頃の新聞に「一口投書」という欄があった。投書と言っても現在の投書欄とは全く

別物だ。手元にあるものだけなので、どのくらいの頻度や期間だったのかわからないが、例えば……。

<大瀧村墮落生の○○君（実名）は父上からも学費が出るのだから此際心を変て一層勉学して立派な俸給を賜る人物となり錦を故郷に飾り玉へ> / <秩父大宮町の込田さん余り人の事を悪く云ふては不可ませんよ万事实際を調査し而して後悪く云ふとも善く云ふともしなさい> / <所澤の○○さん所澤などにくすぶって居らず奮発一番……孜々と勉強しなさい>

このように悪口とも余計なお世話ともとれる匿名の投書が山並みのように連なっている。現在のSNSに通底するものがあるようにも感じたが、当時は新聞がこのような場を提供していた。

## ●けしからん見出し

ここまで書く必要はあるのかというケンカラン見出しや、どんな事件かわからんというビックリ見出し、現在の常識からかけ離れた見出しをはじめ、品性を欠くのでは？と思うような見出しも多い。内容を的確に伝えるというより、読者の関心を引くことを重視しているような印象だった。

### 《美人と年増》

まずは、事件の内容とは無関係に「美人」という言葉をつけた見出し。<前部長の姪で美人てる子；運転手と駆け落ち> <医学士の一人娘が万引；浦和小町と評判の美人> <川越美人の水死> <志木一の美人／男の為に法を犯す（呉服商の金品を着服）> などだが、実際本人を見たうえで「美人」と書いているのかどうかは疑わしい。<美人餅と情死> は、裁縫を習いに行った女性が弁当の餅を咽につまらせ死亡したという事故に対する見出し——読者の興味をひいたではあるが……。

「美人」の見出しはどれも20歳前後の若い女性だったが、少し上の年代になると<大年増の轢死> <四十女の暗中飛躍> <年増女の自殺> とい

う扱いになる。美人かどうか関係ないらしい。  
<不義娘縊死><哀れ酌婦の果て><狂女の放火>に至っては何の配慮もない。埼玉新報社は明治39年に「芸妓十美人投票」（投票で決める県内芸妓の美人コンテストのようなもの）を行っているし、自社の周年記念式典では、模擬店女中を料理店女中や芸妓から募集、新聞紙上で大々的に投票を呼びかけてもいる（これも料理店女中の人気投票のようなもの）。見出しにしても投票にしても、女性に対する見方・考え方が透けて見えるようだ。

#### 《悪漢やら曲者やら》

男性に対しても<悪少年時計を盗む><泥酔漢の溺死><乞食の凍死><浮浪人の無銭飲食><熊谷に出没する悪漢><放火窃盗の悪青年><酒屋を欺く曲者><不良少年捕はる><呆れた乱暴男><浦和の悪青年>のような言葉を好んで使っている。罪を犯したから「曲者」なので生来「曲者」だったわけではない。これでは元々「曲者」だったような見出しだ。

<拾った恋も破れて没落受験生が服毒>なども気の毒な見出しだが、「傘をさしていて汽車が来るのに気づかず事故にあった男性“につけられたく眞抜け（ママ）男の轢傷>や、“徴兵を厭って覚悟の鉄道自殺を遂げた男性”に対する <痴者の轢死>などは、気の毒以上に書いた人の品性を疑いたくなる。

#### 《老爺と老婆》

“老人”という言葉は何歳以上に使われるのか。当時の新聞を見ていると現在の老人（高齢者）よりはるかに若いことに驚く。最初の驚きは大正元年の<老婆の咽斬り>という記事だった。この老婆が57歳だったからである。見出しの「老〇」を気にかけるようになったのはそれからのことだ。

<不埒な婆（50歳）><老婆の転落と小児の病死（69歳）><粕壁「島萬」の老婆（60歳代前半）><老爺の横領（61歳）><放火老婆の縊死（62歳）><老人の投身（62歳）><老爺の縊死（72歳）><老婆の凍死（79歳）><老爺の生埋め（61歳）><老女短銃自殺（52歳）><老人の生倒

れ（50歳前後）><徒歩主義の老女子（60歳を超えた）><円タクと市電で老婆と孫轢かれる（62歳）>……。

ほとんどは60歳代（しかも前半）で中には50歳代もいる。子どもの頃聞いた童謡「船頭さん」も「今年六十のお爺さん」だった。戦前まで平均寿命は50歳ほどだったから——昔は乳児の死亡率が高かったので単純に比較はできないが——60歳は「老〇」になるのだろう。

この文章を書いていた折も折「読売歌壇」（読売新聞2024. 11. 12朝刊）で一首の短歌と出会った。“郷土史の中に祖父が古老として載っていたが、その祖父の年齢は50歳だった”という内容で、歌は<歳はとみれば五十歳なり>と締めくくられている。老爺・老婆について考えている時だったので少なからぬ縁を感じたが、これも50歳なのに古老だ。見出しに使われていた「老〇」も当時ならあたり前だったということだ。年齢の概念の変化は予想以上に大きいことを改めて認識したのだった。

#### 《いったいどんな事件？》

<菓子折りに十円圓紙幣>（明45）警察に引致された者の親戚が、罪の免除を頼みに菓子折りを持って刑事の自宅を訪問。菓子折りの底に紙幣をさし入れてあったためその者も引致された。／<寅公白骨と化す>（明42）自分の妻と子どもを殺して逃走、行方知れずだった森寅次郎が、2か月後山林で縊死し白骨化しているのが発見された。／<埼玉小僧捕まる>（大8年頃）埼玉県下各町村など20余ヶ所を襲った強窃盗犯で「埼玉小僧」と呼ばれる前科7犯の男が捕まった。／<猫、犬を生む>（明39）飼い猫が3匹の子猫を生んだ翌朝さらに犬の子を生んだ。珍しいので大切に育てるが姿も鳴き声も犬で、耳・足・毛並みに猫らしきものが見られるという（結局どちらだったのかは書かれていない）。／<ミソ汁の悲劇>（昭9）炊事中に味噌汁をひっくりかえした若妻が夫に叱責されたためガス自殺した。／<銀と石が矢鱈に降る>（大2）民家の天井裏で物音がするので確かめるが何もなく屋内に石が降るようになった。その後瀬戸物の狐を買ってきて飾ったところ石とともに銀

貨も降るように……。巡査が天井裏を調べると綿をしいた寝床のような中に銀貨があったという(石や銀貨が降った理由は書かれていない)。/<プランコ往生>(大2)は、はな(71歳)が自宅で縊死したという事件だが、どんな事件か伝わらないばかりか、あまりにも無神経ではないか。

## ●求人・職業紹介

新聞の求人欄は今も見かけるが、これはいかにも明治を感じさせる求人広告だ。<小僧募集/年令13~15才まで/高等小学3年以上のもの/伊豆蔵呉服店>(M41)。小僧という言葉も、13~15歳という年齢も、小学3年以上も、今では考えられない。当時の子どもの状況=世相が否応なしに伝わってくる。

昭和3年の読売新聞に載っていた「学校を出た女の職業案内」も興味深い。戦前の図書館員について調べているときに見つけた記事だ。<学校を卒業して新たに就職せんとする女子>のための職業として紹介されているのは、タイピスト、看護婦、産婆、図書館員、製図手、速記者、美容術、自動車車掌、店員、モデル、事務員、私立探偵、電話交換手の13種で、<長き特殊の修業を要せぬ>職業ということで医師、教師、薬剤師は除かれている。このうち看護婦から自動車車掌までの7種は、養成所や学校、見習いなどで6か月から1か年程度の修業が必要とされ、さらに看護婦と産婆は検定試験があった。

図書館員、製図手、速記者、事務員の初任給は月30~60円位で比較的高収入だが、高小または高女卒という条件。学歴は不問だが養成所などに通う必要があるのはタイピスト、美容術、自動車車掌で、初任給30~60円位。<義務教育終了者>の電話交換手は初任給18円位、<尋常小学卒業以上>の店員は日給60~70銭である。上の学校に進学できる人などほんの一握りだった時代だが、技能を身につけることである程度の収入を得ることはできたようだ。ただし自動車車掌と電話交換手には<21歳以下の未婚者>という条件も加わっている。

異色なのはモデルと私立探偵だ。新聞で紹介さ

れるほどメジャーな職業だったのだろうか。モデルの必須条件は<四肢の円満に発達している肉体美ある者>で、収入は3時間で裸体1円20銭、着衣1円。歌手の淡谷のり子も貧しい学生時代にモデルのアルバイトをして稼いだという(『[生まれ変わったらパリジェンヌになりたい](#)』/淡谷のり子/早川茉莉 編/河出書房新社/2023)。私立探偵は<資格 体力強壮機敏なる者>で学歴不問。収入は<腕次第>とある。清々しいが、誰にでもできる仕事ではなさそうだ。

## ●禁酒広告

これは大正2~3年の新聞にあった。「禁酒広告」と大きく書かれ“自分は日本酒はたしなまずビールを飲んできたが去る16日よりこれを厳禁したので諸君にお知らせする”という内容の文章と日付・居住地・氏名を記している。「自今禁酒」という言葉の下に住所・氏名を記しただけのシンプルなものも数件あった。はてさて広告まで出すに至った理由は何なのか、はたして効果はあったのか、その辺りは興味深い。

ほんの一部を見ただけなので“当時の新聞は……”などと述べることはできないが、かなり恣意的な記述も多いように感じた。“読者の関心をひきさえすればよいのか”と言いたくなるような見出しや心ない投書が、「新聞」に堂々と掲載されているのにも驚いた。しかし約100年を隔てた今、術中にはまり見出しに関心を寄せた人間がいるのだから(私のことである)、当時の記者たちは“狙いどおり”とほくそえんでいるにちがいない。「新聞」は大幅変わったが「一口投書」などに通底するものは、まちががなく別の媒体に引き継がれている。人間の本质はそうそう変わるものではないらしい。

## 三色パン

今から30年くらい前だったと思う。三色パンの中身(餡やジャムなど)を調べたことがある。調べるといっても、たまたまパン屋に三食パンがあれば買って食べただけのことだ。“わざわざ”とい



うほど積極的なものではなく探求心もなかった。試食(?)はほとんど生活範囲のパン屋だったが、出先でも三食パンがあれば買っていた。一応中身の種類、形や色などをノートに絵入りで記しておいたのだが、行方不明になっていたそのノートが先日出てきた。見れば、随分食べたつもりだったが(書き忘れもあるだろう)たった15種類。今では三色パンを売っているような店自体を見かけなくなったが、その頃(たぶん1990年代頃)でも既に、どこのパン屋にもあるほどの人気商品ではなかったのかもしれない。その時の結果は、餡(こし餡、小倉、白)14、クリーム(カスタード風)12、ジャム(苺、杏)11、チョコ8だった。餡はこし餡が圧倒的に多く、ジャムは苺が多い。三色の組み合わせは「餡、クリーム、ジャム」という組み合わせが一番多く6点、次が「餡、クリーム、チョコ」の4点、「餡、ジャム、チョコ」と「クリーム、ジャム、チョコ」の組み合わせはどちらも2点。「餡(こし)、餡(白)、ジャム」が1点だった。

インターネットには“三色パンの中身と言えぱ?”という緊急アンケートの集計結果が報告されているし、「黒・白・緑の餡が入る幻の「三色あんパン」は今も存在するか」という東海テレビの番組による独自調査(2023.3.28放送)も視聴できる。

また『毎日新聞』(2012.2.28)の「もう一度食べたい」という欄でも、三色パンを取り上げてい

た。2012年時点でも三色パンを売るパン屋を探すのは大変だったらしい。文京区でみつけた店は、昭和20年頃にく餡、クリーム、ジャム(苺)だったが、東京五輪(1964年)を過ぎたあたりから、ジャムがチョコに変わったという。

菓子パンの出自について、アンパンは1874年、ジャムパンは1900年(ともに木村屋)、クリームパンは1904年(中村屋)とはっきりしているのに、三色パンについてはパンの文化史関連の本でも言及されていない。あきらめかけた頃、『メロンパンの真実』(東嶋和子/講談社/2004)と『食のはじめて物語』(服部幸應 監修/講談社/2009)に、中村屋の昭和9~11年頃のパンフレット写真が小さく載っているのをみつけた。中村屋でその頃販売していたパンの写真と名まえ・値段が記載されている。(虫めがねで見ると)そこに三色パンが! 値段は13銭、クリームパンの8銭より高い。3つを横に並べた横長の四角いパンだった。少なくとも昭和初期には三色パンが存在したということだ。中身は記されていないが、「餡、ジャム、クリーム」でジャムは杏——というのが私の勘(苺はまだ高額だったので木村屋も杏ジャムだった)。三色パンの記事やインターネットの日付を見ると、ほとんどが2010年代以前。なるほど最近三色パンを見かけないはずだ。

(なみき せつこ)

## DMがたろく

言いにくいことが

言えないひとの

政治学

岡田憲治

「給料上げてと会社に言いたい」  
「暴言やめとと老親に言いたい」……

じつとガマンするのでも、ガツンと言ってやるのでもない。  
人生を自分でつくっていく、大人のための対話術。1980円

晶文社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-11  
TEL 03-3518-4940 <https://www.shobunsha.co.jp/>

**ESTRELA** ■2024年12月号  
No.369/12月10日発行  
B5判 64ページ  
定価1,205円(税別)

[特集] ミクロデータ利活用の国内外の動向

■公的統計マイクロデータの更なる利活用に資する研究について/高部 勲(立正大学データサイエンス学部 教授)

■リモートアクセスによるマイクロデータの提供に関する海外動向/伊藤 伸介(中央大学経済学部 教授)

■ニュージーランドにおける統計マイクロデータ利活用/滝澤 有美((公財)統計情報研究開発センター 主任研究員)

公益財団法人 統計情報研究開発センター(Sinfonica)  
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5階  
TEL : 03-3234-7471 <https://www.sinfonica.or.jp/>

佐藤邦政・神島裕子・榊原英輔・三木那由他 編著

## 認識的不正義 ハンドブック

理論から実践まで 研究を概観し、現実の問題を自ら考えるために。 3300円



青柳英治

## 専門図書館における キャリア形成と 人材育成

修得した知識・技術を担保し得る認定のしくみを検討する。 5280円



勁草書房

TEL 03-3814-6861 \*価格税込  
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1 <https://www.keisoshobo.co.jp>

剣と魔法とドラゴンの世界は  
どのように描かれてきたのか?

## 映画で味わう 中世ヨーロッパ

歴史と伝説が織りなす魅惑の世界



図師宣忠 編著

\*A5判美装力カバー  
324頁 3300円

ようこそ、魅惑の  
(中世映画)の世界へ

ミネルヴァ書房 京都市山科区日ノ岡堤谷町 1  
TEL075-581-0296 \*価格税込

経済学で読み解く

## 大相撲300年史

本所、そして両国の磁場

山村英司 [著]

江戸時代に村の力自慢が集った勧進相撲は、いまや世界の若者が競うプロスポーツに——その歴史の必然を、経済学とデータで解説!

●予価2640円(税込) ISBN 978-4-535-54096-5



1月下旬刊

行動経済学で

## 「未知のワクチン」に向き合う

●定価2420円(税込)  
ISBN 978-4-535-54074-3

佐々木周作・大竹文雄・齋藤智也 [著]

行動経済学者と感染症学者が、パンデミック下の「未知のワクチン」に挑んだ。はたして、ワクチン接種はナッジすべきなのか?

1月中旬刊



日本評論社

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4  
☎03-3987-8621 <https://www.nipponyoko.jp>

戦後〜現代まで、  
6時点の地図を並べて  
体感する。  
中東世界の变化を

1878  
1920  
1948  
1967  
2003  
2024

近現代の  
中東150年  
くらべて楽しむ地図帳

## 中東近現代の150年 くらべて楽しむ地図帳

関真興 編著

定価1,980円  
(本体1,800円+税10%)



山川出版社

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-13-13  
TEL 03-3293-8131 FAX 03-3292-6469 <https://www.yamakawa.co.jp/>

## ガザの光 炎の中から届く声

リファト・アルアライール ほか 著  
ジハード・アブ・サラーム、ジェニファー・ビンズ、  
マイケル・メリーマン=ロツツェ 監修  
齋藤ラミスまや 訳 早尾貴紀 解説

◎2970円

## イスラエル vs. ユダヤ人

【増補新版(ガザ以後)】

中東版「アパルトヘイト」とハイテク軍事産業

シルヴァン・シベル 著 林昌宏 訳 高橋和夫 解説 ◎2970円

## 〈逆上がり〉ができない人々

発達性協調運動症(DCD)のディストピア

横道誠 著

◎1980円

## わたしたちの中絶

38の異なる経験

石原燃、大橋由香子 編著

◎2970円



## 成人式を社会学する

元森絵里子=ハン・トンヒョン 編

誰もが知る「風物詩」の意義や由来とは? 独特の恒例行事から日本社会の機微に触れる。 四六判 定価2,640円



## 社会心理学

社会を動かすもの・変える力

杉浦淳吉・尾崎由佳・村山 綾 著

日常にあふれる課題や違和感を読み解く  
思考法が身につく——学んだ先に見える  
社会とは。 y-knot 四六判 定価1,980円



有斐閣

東京都千代田区神田神保町2-17  
<https://www.yuhikaku.co.jp/>

価格は  
税込